

本多利明と朴齊家

——実学思想の対比的研究——

六〇

許 晃 会

一八世紀後半のはぼ同年代に属する韓国の朴齊家（一七五〇～一八〇五）と日本の本多利明（一七四四～一八二二）の実学思想を、彼らの名著である『北学議』と『経世秘策』を中心にしながら、彼らの商業観、あるいは経済思想に重点をおいて、対比的に検討して行くことにする。

朴齊家は『北学議』の序文で「孟子の時の陳良の言葉」を取って「北学議」にしたと書いている。陳良は中国（中原）の楚の人である。彼は周公と孔子の道を好み、南方の楚の国から北方の国に至り儒教の道を学んだ。のちに陳良は、北方の学者よりもすぐれた学者になったという。朴齊家はその故事により中国文化、すなわち清文化を学ぶという意味で「北学議」としたのである。四回にわたって清の燕京を訪れた朴齊家は、するどい洞察力で李氏朝鮮と中国との現状を対比し、彼我の文物の差を説明し、なによりもまず排清崇明という名分論を脱し、「学中国」の北学意識を持つべきだと主張した。当時の李氏朝鮮の国家財政はきわめて窮乏し、国民の生活は悲

慘な状態にあったが、為政者たちは何の対策もたてずに、いたずらに党争にふけり、北伐という虚言に取り付かれていた。明の年号を引き続き使用し、清を無条件に夷狄視する雰囲気支配していたのである。このように非生産的であり、形式的な名分にとらわれていた状況のなかで、没落した一部両班と庶子出身の学者の間から時代おくれの政治制度を批判し、比較的進歩的な改革案の提示を可能にする新しい学問研究の気運がおこってくる。その中、朴趾源は『許生伝』の中で、許生と訓練大将李滄との対話を通じて、名分的北伐論の虚構性を指摘している。これに拍車をかけたのが朴齊家である。彼は『北学議』を通じて、清文化の優秀性を紹介し、その積極的な導入を主張した。彼はあらゆるものについて李朝は中国に劣っているとみなした。中国に比しいかに衣食住が劣っているかを朴齊家は、次のようにいっている。

中國之民、雖荒村小戸、率皆灰築、數間之庫、不用斛包、……
我國小民之生、皆無朝夕之資、十室之邑、日再食者不能數人、
……中國之民、率皆服錦繡・裳氈襪、有牀有榻、耕夫亦不脫衣、
皮鞋束脛、叱牛於田、我國村野之民、歲不得木綿一衣、男女生

不見寢具、……中國、無京外之別、其大都會、如江南・吳蜀・閩粵之遠、而其繁華文物、反勝於皇城、我國、都城數里之外、風俗已有村意、蓋其衣食不足。

このような状況なのに指導層にある人々は、識見が浅く氣質がねじれていて、ある人は中国にも五穀があるかと聞き、また中国の文章は李朝より劣るとか、あるいは中国には性理学がないと断定し、そして中国を胡という一言で罵倒したりすると朴齊家はなげいている。彼はかりに北伐論を実践するにしても、なによりも夷を知らなければならぬといひ、そして、本当に利があるならば、夷の文化だとしても、その法や制度を積極的に受容すべきだという北学論を展開した。

苟利於民、雖其法之或出於夷、聖人將取之、而況中國之故哉⁽²⁾ こうした主張は、当時の社会では実に果敢なものであった。しかしひととき学界、思想界を風靡したこの新しい学風も、朴齊家を初め、実学派の学者たちがみな政権から離れていた関係で、その学問を活用する機会を得ないまま、一九世紀初めのキリスト教傳布の辛酉迫害以後、非運に巻き込まれることになる。そして一九世紀末にいたって、この学風は初期開化派に継承されることになるのである。

さて一方本多利明を見れば、利明が属していた社会は、田沼意次の擅権・松平定信の執政の時代にあたり、近世の社会的・経済的矛盾が表面化しつつあり、また北辺に国防問題が生じていた。彼は国内の各地を旅行しては、各々の地域の地理や社会風俗、物産などを視察調査した。そして利明はいたる所に貧困と悲惨を見いだすので

ある。

故に近来農民大に困窮して疲れ果たる上、天明癸卯以来、凶歳饑饉の度々に、関東より奥羽に至るまで農民餓死して、良田畑を亡処となしたる高、数百万石に及びたり。奥州一ヶ国の餓死人ばかりも二百万人に及びたりといへり⁽³⁾。

利明が経世家として直面した時代は、まことに容易ならぬものであった。彼は同時代が悩みつつあった内外の諸問題に対し、その問題の本質は何であり、またその原因がどこに存するかを洞察しようと努める。こうした問題の解明を通じて利明が求めた解決策は、百姓を困窮から救済するには交易を通じて国富を増大ならしめる以外にないということであった。その交易というのも単に国内にとどまるのではなく、全世界の国々を相手にした海外通商であった。その前提条件としては、何よりも海上交通の問題がある。まず航海術に通じなければならぬであろう。航海術をえるには、オランダ語の習得が必要である。利明は数多い著作で、しきりに蘭学にふれている。彼は特定の師について蘭学を学んだわけではないようであるが、独学によって、あるいは山村才助らとの交友を通じて、天文・測量・地理の西洋流の知識を獲得し、やがて航海関係の書を翻訳するまでに至る。そのような経過をへて利明は、その独自の方策による経世済民を願ったのである。これから取り上げる『経世秘策』は寛政一〇年（一七九八）になったもので、『西域物語』と並ぶ彼の代表作である。彼の経世論のなかには幕府の施政方針を非難する所が少なくない。周知のように寛政改革における思想統制は洋学にも及ぼされる。幕府は洋学を統制して自己権力の困いの中に置こうと

する。林子平の本は没収され、一七九二年には終身軟禁の処分を受ける。当時において利明の所説は、李朝における朴齊家の説と同じく、危険思想とみなされるが、利明は林子平などとは違い、著作も出版せず、少数の有識者に回覧した程度に止めた為に、幕府の彈圧に触れずに済んだのである。

以上、朴齊家と本多利明について概観したが、両者の主著である『北学議』と『經世秘策』との商業観を中心に分析し、彼らが一貫して追求したものは何であったかを以下でさぐって見ることにする。さらに朴齊家が中国から学ぶことを提唱し、利明は西洋から学ぶことを提唱した理由はどこにあるのか、彼らの思想の共通点と相違点、実学思想全体における彼らの位置などが問われるべき問題であらう。

二

本多利明と朴齊家は、彼らの主著、『經世秘策』と『北学議』の中で、非常に接近した考え方を示している。二人は国の貧困を農民の困窮にあると把握して、その貧しさからの脱却、貧民の救済のための方策として、何よりも商業的な面に着目したのである。その基本たる第一の方策は、船や車等交通運送手段の改善であった。

然れば国務の本は船舶にあり、其船舶は海洋涉渡を自在にせざれば国用を達すること難し。

と利明は説き、船を絶対欠かせない国務の必須条件として捉えている。朴齊家も彼の詩の中で、次のように船や車の重要性を唱えている。

細究此何故、其用在舟車、舟能通外国、車以便馬驅、二者不可復、管晏將何如。

また、李朝の車には、威鏡道で使う自用車、軍門で使用する大車、濬川司には沙車があるが、すべて粗末であり実用的ではない点を指摘し、腕のいい工人たちを選抜して中国に行かせ、車作りの方法と運用方法を習って来ることを助言する。やがて性能のよい車が通行すれば、自然に道路も発達し、各地方の生産物のよりよい流通をもたらすようになるだろう。そのことは物価の平準化をもたらすし、財貨が有用になり、生産性は向上、消費が促進される。商業の発展は国力と直結する。用車論と用船論とは、不可分の関係を持っている。物資の流通のためには、陸地では車を利用し、海路では船を利用することが、先決条件である。たとえば車一〇〇〇台に載せる物量を船一隻に載せられ、陸路で車を利用して一〇〇〇里を行くより、船で一〇〇〇里を行く方が便利であると説いている。

夫百車之載、不及一船、陸行千里、不如舟行萬里之為便利也。

韓国は三面が海に囲まれていて、高麗時代には、宋との通商に際して船舶が利用され、中国の明州から禮成江まで七日しかかからなかった。そこで通商にあたっては必ず水路が重んじられた。船舶の利用にあたって、朴齊家は車と同様、船の製造技術の遅れを指摘し、中国の先進技術を受け入れることを力説したのである。このように本多利明と朴齊家は運送手段の改善を強調し、それによる物資の全国的流通と物価の安定、あるいは米価の安定をはかることを説いた。たとえば利明は、

故に信州第一の高価なる物塩なり。米価に三倍せり。山国なれ

ば大國の國産皆國內にのみ交易して、國內に自腐するなり。大川ありて通船せざるといふは、川中所々に大岩石ありて滝となり、流水猛勢なるゆへ土人危殆て通船せず。

と説いている。諸障害物を除去して船が通行しうるようにすれば、地方による物価の偏差はなくなるとみなした。彼はさらに、食物の中心である米の値段は一切の食物に直接影響を与えるので、米価を調節する必要があることを力説している。ここで利明は、米相場を商人の營利主義に任せることに反対し、米価を國家のもとにおいて管理すべきことを強調した。なぜならば己れの利の爲には何ものをも犠牲にする商人根性が、一層大なる利潤を得ようと買占めや売り惜しみを日常茶飯事のようにやっているからであると利明はいう。

では、どのように國家が米価を管理するのか。すなわち日本國中の各主要地に交易館を建て、その地方の收穫によつて生じる自然の相場で、米穀を買取つて貯蔵する。次に全國中の豊凶作を檢査して、國家で消費するだけの米穀を残し、他は全部凶作の地域に運送させて饑饉を救うのである。ただしこの米を運ぶ運送手段は、公儀の船舶でなければならぬと条件をつけている。かくして万民は非常な利益を被り、農民は蘇生したように喜ぶだろう。こうすること、別に嬰兒殺し禁止に関する制度を立てなくても、その惡風は自然と止み、良民が非常に増加するのみならず、一度捨てた田地も再び開發されるようになり、万民が心から為政者に心服するようになること説くのである。同様に李氏朝鮮においても当時、交通は不便であり、地方による物価の差は甚しかったのである。

斷之曰、無車之故也、今夫全州之商、挈妻子賣薑菰、而步往龍

灣、則利非不倍徙也、筋力消於路、而室家之樂無時也、原山之馬、馱海帶鮑魚、三日即還則小有餘、五日則齊、十日留則大縮、歸馬之贏不加、而留馬之費甚廣也。

朴齊家はこれにつづけて、李朝の地理的条件を説明し、最北端から最南端まで行くとしても、十日ないし十二日以内で充分な國が、流通手段の未發達により物資が偏り、商品としての役目を果たさないことを、痛憤している。

我國、東西千里、南北三之、而王都居其中、則四方物貨之來集者、横不過五百里、縱不過千里、又三面環海、近海處各以舟行、則陸地之通商者、度遠不過五六日程、近則二三日程、自一邊至一邊者、倍之。

これはすなわち百姓たちが、物資を互いに交換流通させて用途を広げたいにもかかわらず、運送能力、運送手段が不十分であることを指摘しているのであろう。したがって、國家が運送手段を積極的に開發し、既存の生産されている物資だけでも十分流通させて、物価の平準化をはかるべきであると考えた。生産された物資が利用されなくなれば、再生産は不可能であり、かくて國家經濟はいっそう苦しくなると見たのである。また有用な物でも、流通させなければ一ヶ所に偏在し、結局は不足することになるとみなした。

その商業の担い手として、利明は利益ばかりに血眼になっている商人のかわりに役人の参加を主張したが、他方朴齊家は無為徒食する兩班をも、國家支援のもとで商業に従事させるべきことを説いている。

夫遊食者國之大蠹也、游食之日滋、士族之日繁也、此其爲徒、

殆遍國中、非一條科宦所盡羈繫也、必有所以處之之術然後、浮言不作、國法可行、臣請凡水陸交通販賣之事、悉許士族入籍、或資裝以假之、設廛以居之、顯擢以勸之、使之日趨於利、以漸殺其游食之勢、開其樂業之心、而消其豪強之權、此又轉移之一助也。

國中にふえつづける遊食者の士族を國家を食いつぶす大きな虫と見て、水陸の交通による貿易・販売を兩班士族にまかせろべしというのである。そのために國家は、彼らにいろいろな特典を与えなければならぬと言っている。当時の李朝の社会的雰囲気からすれば、士大夫は貧しいからといって田畑仕事をするとか、市場に出て行って物を販売するとか、工具を持って手工業に従事することは一般に笑われものであり、はなはだしきに至っては、婚姻さえ出来なかつた。だから、家に一銭もない士大夫でも、空威張りし、大言壮語ばかりするのが実状であつた。ではこのように貧しい士大夫が着ている服や食、べる食糧などは、どこから出てくるのか。彼らは結局、權力に頼らざるをえないのであり、こうして請託するくせがつき、僥倖を望むことになるのも当然であつた。それでつまらない課試にも応募者が千名を越え、ソウルで実施する大同科には数万名が応募し、かくて遊食階層が絶えず生じてくる。それゆゑ朴齊家は、士大夫を優先的に貿易に従事させようとしたのである。彼は兩班の生理と氣質を暴露した師の朴趾源よりさらに一步進んでいた。朴趾源は抑商策を主張したが、朴齊家はそれに反対し、むしろ商業の振興を唱えた。士族が商業に従事することを公認したのは、一八九四〇五年の甲午改革の時であつたから、彼の提議がどれほど先駆的で

あつたかがわかる。他方、本多利明は交易の振興を説きながら商人に対しては徹底して批判的である。

既に天明七丁未年の夏、御府内に於て、三斗五升入百俵の価、金二百五十兩より三百兩までに引揚げ、猶も此上に引揚べき奸計にて、売米売り切れ、町米無之旨を云へり。実に無之と云にてはなし。随分相応にはあれども、此上を高直に売んと奸計・剛欲を企し也。商賈は此の如く恐しき心根なれば、何れ永久を策るの密計なければ、安堵なりがたし。

このように商人を、利潤ばかり追求する恐しい心根の所有者として取り扱っている。したがって利明は、渡海・運送・交易を商人に委ねるわけにはいかず、公儀直轄を強調するのである。それは朴齊家の私貿易論と違つた官營交易論である。ここで注意しなければならぬのは、江戸前期の抑商策が、重農・賤商観から主張されているのに対して、後期の子平にしろ、利明にしろ、富商への憎悪ははげしいが、彼らは商業自体の利益、その価値を重視し、商業を蔑視する武家氣質をかえつて批判している点である。利明の抑商策とは商品流通を官ないし藩の権力の下に掌握し、商人に代つてその利を取めようとすることである。利明の官船官營交易論も、また商業資本の利潤を一挙に獲得する手段なのである。それでは、朴齊家の商人に対する見解はどうであつたか。

夫商處四民之一、以其一而通於三、則非十之三不可、海民之以魚爲農、亦猶峽民之以木爲農、今若一切食土、則民失其業、農日益傷矣。

商人も四民の中の一つであつて、全体の三割を占めなければなら

ないとしている。もし一切の民が農業だけに依存すれば、彼らは生業を失い、農業は日ごとに困難になるだろうと説く。すなわち朴齊家は、四民の中でも商業の優位を表わしながら、富国における農業生産それ自体の限界を認識し、商業の重要性を強調したのではなからうか。商人観の違いとともに、利明と朴齊家におけるもう一つの大なる差異点は、身分制に対する態度である。日本社会の四身分制は、多くの欠陥と矛盾を有しながらも、もともと保守的な儒者から利明に至るまで、ひとしく容認されていた。朴齊家が大胆にも、両班を商業に従事させることによって、両班階級の打破を主張しているのに対し、利明は商人が富を積み、その経済力によって武家を圧迫している現状について次のようにのべるのである。

当時の如く武家困窮せしは、頼朝公武家建立以後初てなり。此に於て是非共に改革して、士農工商・遊民と順に立て、其処をなし得ざればならず。⁽¹⁵⁾

つまり、四民の階級を厳立して、経済的にも武家の優位を保持し、封建社会秩序を安定させることを願っているのである。

三

前章でわれわれは本多利明と朴齊家の交易論、商業観を対比的に検討したが、さらにすすんで両者の財政策、経済開発策について検討しよう。彼らは二人とも「一国の骨」である金銀銅など貴金属の海外流出を禁止し、その保護・利用を主張している。

全体を以論ずれば、大昔より諸国にて掘り出したる所の金銀銅は、代々の將軍家及諸侯の家々に伝来、永久蘊積有て、国家の

大用に達すべきは固よりしかり。国家の大用と云は、異国交易に金銀銅を渡すことを嚴禁ありて、日本の国用に立て、永久に遺んことを教示するなり。⁽¹⁶⁾

と利明は言っているが、金銀銅が広大な利用価値を有している以上、永久に日本に止める策を取るのが第一ではないかと主張しているのである。朴齊家の場合を見てみよう。

我國、歲輸銀累萬兩於燕、以貿藥及紬緞、而無以我物易彼之銀者、夫銀爲千年不壞之物、藥飲人半日而化、紬緞葬人、半年而朽、以千年不壞之物、易日月消磨之具、以山川有限之財、輸一往不返之地、宜平銀之日貴也。⁽¹⁷⁾

銀の流失を憂慮し、その備蓄を主張するのは、西洋の重商主義者たちが、銀を重視したことと一脈相通する。金とか銀は永久不変のものであり、その価値は実に大きい。それをつまらない消費財と交換することは、大損害であるとみなした。海外交易における金銀の流出の抑制とその保護ということで利明と朴齊家の考えは一致している。

ところで利明は治平の根本策である「四大急務」⁽¹⁸⁾を説くにあたって、さらにそれらの根本になる通貨調節に対する問題を説いている。彼は通用金銀にある程度の制限を加えて、富に關しては甚しい差別がないように注意することが、この際最も肝要であると考えた。それで彼は、一般に通用する以外の天下の金銀銅は、全部公儀において保存されてこそ、国家の永久策が確立されると言い切る。

なぜ通貨の制限が、それほど天下の治乱に影響を及ぼすのか。通貨の多少と物価の高下とは、因果關係において支配され、制限なく膨

脹させれば、いわゆる物価騰貴の現象を惹起し、金銀の価値が下落する。通用金銀の価値が下落するのは、産出する物産と調和が取れなかつたためである。こうした傾向は、時と共に甚だしくなっている。現在では殊に農民が減少し、米の産出額が不足する一方、通貨はますます膨脹しているので、物価は一日毎に騰貴していると利明はいう。彼は「四大急務」の予備的行動として、是非ともこの通貨調節を実施しなければならぬというのである。

さて消費をめぐる朴齊家の経済政策について見てみると、当時の支配的考え方である奢侈亡国論に反対し、消費がなければ生産が不振になり、生産が不振になれば国民が生活に苦しむと説く。

夫財、譬則井也、汲則滿、廢則竭、故不服錦繡、而國無織綿之人、則女紅衰矣、不嫌窳器、不事機巧、而國無工匠陶冶之事、則技藝亡矣、以至農荒而失其法、商薄而失其業、四民俱困、不能相濟、國中之實、不能容於域中、而入於異國、人日益富而我日益貧、自然之勢也⁽¹⁹⁾。

このように朴齊家は、商業の発達是他産業の発達をもたらすと見ている。商業を発達させるためには、大部分の実学者たちが美德とした封建的儉約思想を排撃する必要がある。朴齊家は消費は単に消費にとどまらず、むしろ再生産を導くことになることを主張したのである。「大体中国は、事実、奢侈にして滅びた。しかし我が国は儉素にかかわらず、衰退して行くのはどうしてであらう。おおよそ物があつても、濫用しないのを儉素といっているのであつて、物がないために断念することを行っているのではない。今、我が国の中には、玉を掘る家がなく、市場に珊瑚などのたからものがない。ま

た金・銀を持って店へ入つても、もちさえ買えない実状である。これが、本当に儉素な風俗のせいであらうか。いや、これは物を利用する仕方を知らないから生産が出来ず、生産することを知らないから百姓は日々窮乏していくのである。」⁽²⁰⁾ ここには朴齊家のすぐれた発想・意識の転換を見ることが出来る。

利明もまた贅沢品の使用の問題を取り上げている。すなわち贅沢品の使用を禁ずる制度では、真の意味の国内生産技術は進まず、技術革新は期待出来ないと見ている。そこで利明は、外国の工産品を輸入し、国内生産を振興させて競争力の増進を図るべきであると主張している。かくすることで人々は、

相互に自業を励み、精密に丹誠するゆへ、自然と国内に名産物多く出来、異国交易杯に大利を得の助とならん。国産の精拙は此所を扶る(を)以、名産物も自然と出来せん⁽²¹⁾。

と主張する。ここで利明は積極的な姿勢をとっている。直ちに船を製造し、外国市場で取り引きをおこない、日本に必要な品物だけを買い入れるようにすれば、シナやオランダ船が来る必要がなく、国中の不自由は一掃され、その両国へ渡す百二十万斤という金・銀を含んだ銅は、国内に残ると断定した。これはまさに、一石三鳥の効果があるのではないか。利明における船は万病に効く薬であった。その薬の瓶に公儀直轄と書いてあつたらなおさらのことであらう。

四

彼ら二人の近代的価値観への志向は、海外通商策によく現われている。当時の運送手段の主役は船で、それを利用した近隣諸国との

往来及び交流は、国力培養・国力増進に結び付くはずであった。兩國が共に鎖国政策をとる中で、開国を主張したのは、いわば体制への挑戦でもあった。利明が石造建築のため、朴齊家が科学技術の習得のために、二人そろって西洋人の招聘を掲げていることは、特記したい。

船舶の利用をめぐってもうすこし詳しく見てみよう。まえにも触れたように、朴齊家は中国の造船術を習得し、性能のよい船舶を作り、それをもって中国と通商する必要を力説した。韓国の歴史上、船による海上活動を見ると、百濟（～六六〇）時代は、中国の南朝と黄海を通じての交流があり、新羅（～九三五）末の張寶高という人物は、すぐれた造船術をもとにして、西海および南海の制海権を掌握していた。高麗時代（九一八～一三九二）には、碧瀾渡から黒山島をへて揚子江に至る新しい航路が開拓されるなど、海上活動が活発に展開されている。しかし高麗時代のこのような海外進出は、李氏朝鮮（一三九二～一九一〇）に至って、その鎖国的な政府施策によって、全く萎縮してしまふ。かくて朴齊家によって海上活動の強化と、そのために優秀な船舶の製造が急先務であることが説かれるのである。彼は中国の先進造船術を学ぶためには、風波に漂流した船をも利用しようとした。もし漂流した中国の船が、海岸の村に着いたら、その船には、きつと船を作る工人なり技術者がいるはずであり、彼らが滞在する間に腕のいい李朝の工人がその船の製造・修理技術を習得したらいいと説いている。ここには船舶製造についての切迫した朴齊家の立場がよく出ている。

こうして中国の造船術をおぼえ、船舶を製造したのち、国の大き

な病弊である貧困を救うためにとる道は、中国と通商するのみであると説いたのである。のみならず、相互に有無を交易することは天下の通義であると国王に上疏している。朴齊家は海外通商の順序として、まず中国との貿易をあげ、その次は日本・琉球・安南・西洋にと拡大して行く考えを示している。ひたすら中国とのみ通商し、他国と通商しないのは、一時の臨機応変策にすぎないのであって定論ではない。国力がもうすこし強くなり、国民の生業が安定すれば、当然海外の諸国と通商しなければならぬと主張したのである。つまり、彼は一種の段階的通商論、段階の開国論を提示しているのである。朴齊家の海外通商論は、北学論の帰結でもあるが、鎖国主義が頑固な社会通念になっていた李氏朝鮮で、それはまさに破格的な提議であり、開国を余儀なくされた一八七六年より一〇〇年も先立つ主張であった。彼の開国論はその後、李圭景（一七八八～？）と崔漢綺（一八〇三～一八七七）によって再び主張され、人脈的には、彼の弟子である金正喜（一七八六～一八五六）を通じて姜璋（一八二〇～一八八四）に伝えられる。姜璋は江華島条約の締結を初め、開国の時、大きな影響を与えた人物である。

一方利明の用船論は、天下の物産を公儀直轄の船舶で運送交易し、天下中に物品の有無を通じ合ひ、万民の貧困を救うことをめざすものであった。イギリス、フランスなどヨーロッパ諸国がなぜ無敵であるかといえ、それらの国々は天文・地理・航法の諸技術にすぐれていて、全世界の大洋を容易に航海しうるからであるといっている。利明はひきつづき、属島の開業論に入る。開業の順序としてまず、船を目的地の附近に派遣して諸所を測量し、土地の面積、

産物、人口等の調査をすることが先決である。開業して十分に利益を得るとの見通しがついてから、実行するのが正しい。もしこれに成功すれば、諸金山も開け、諸産物は本国に輸入され、国力の増大をもたらすに相違ないと説くのである。

さてここで当時の一般人の外国認識について、両者がどのようにいつているか、簡単に見てみよう。

日本より遙に良國之大国を愚庸之忘言に迷惑して、大益を不_レ得取_一は大なる日本之不幸なり。²³⁾

日本人は古来、余りにも自画自賛の傾向がありすぎることを、利明は指摘している。朴齊家は、次のようにいつている。

今人、只是一劑膠漆俗膜子、透開不得、……西洋人、畫人物、以人瞳黑汗、點睛、故眇睚如生之説也、……其不信我、而信彼之由、可知也巳、今人正以一胡字、抹殺天下、而我乃曰、中國之俗、如此其好也、與其所望、大異故耳、何以明之、試言於人曰、中國之學問、有如退溪者、文章、有如簡易者、名筆、有勝於韓漢者、必怫然變色、直曰、豈有是理、甚者至欲罪其人焉、……余與數人辨、頗有謗之者、因書此以自警_一。

この朴齊家の言に見られるように、一般国民がいかに誤解と偏見にとらわれていたかがわかる。このようなはなはだしい無理解から人々を脱却せしめ、貧困から人々を救済し、国力を増大せしめるために朴齊家は北学を、利明は蘭学を導入し、中国、ヨーロッパに学ぶことを主張したのである。

以上に見るようなさまざまな経済開発論を朴齊家は、国王に進言する「上書」を通じて、上からの改革を狙っていた。利明もまた至

る所で、「英雄豪傑・名君」の出現を待ち望んでいる。

依て明君の出給ひて大慈大悲の制度建立あらば云々。²⁴⁾

仕向け能ければ天下の英雄・豪傑躍り出、御手足となりて忠節を尽し云々。²⁵⁾

利明は常に才能ある名君を求めている理由を、世の中は英雄と共に動くからであると説いている。英雄があつてこそ建白する人も出現し諸策が採用されるのである。英雄とは現実の文脈においては君主であらう。

利明の見解は、一方では洋学の影響を強く受け、他方、当時の逼迫せる国内事情に刺激され、時代の機運に促されて生じたものである。江戸時代、一般の諸学者が中国の学問の影響のもとに、それを祖述していたのとは、大いに異なっている。鎖國の時代において、開國進取の立場によって、日本の国情を吟味し、富國発展の途を明らかにした利明は、先見の明を持っていた。しかし、『経世秘策』の卓越した国家豊饒策は、名君にめぐりあえず、——幕府政策に受け入れられず——明治時代に入ってようやく実現されはじめたのである。

一方、朴齊家の『北学議』が、李氏朝鮮の文物や制度について、いろいろ遅れたものを、果敢に改革しようとしたのは、良かったとしても、朴齊家は、中国の物質文明に心酔した結果、それらの無条件の導入・受容を主張した。そのせいもあって彼の説は利明のそれと同様、実現されず、——上からの改革ならず——終った。朴齊家と本多利明は、外国の先進文明・技術にあまりにも傾いてしまい、言語や文字まで取り替えることに言及している。朴齊家は、

我國地近中華、音聲略同、舉國人而盡棄本話、無不可之理、夫然後、夷之一字可免、而環東土數千里、自開一周・漢・唐・宋之風氣矣、豈非大快⁽²⁾。

と中国語の使用を説き、利明は、

支那の文字は字数多くして、国用に不便利なれば外国に通じ難く、漸く朝鮮・琉球・日本の三ヶ国のみ通用せり。亜細亞洲の内三、四ヶ国通用すれども、其真意を解し得ることを難しとせり。歐羅巴の国字数二十五、異体ともに八品ありて、天地の事を記るに足れりとせり。最以簡省なり。……支那の故事悉皆日本に模写して、国用に達し益を得んよりは、我邦自然具足の益を取るを簡捷とせり。⁽³⁾

と歐羅巴の国字の使用を説いている。

朴齊家の経済説は利明と同様、全般的に重商主義的・近代志向的色彩を帯びていた。彼の両班を商業に従事させる論と西士招聘論は、実に画期的なものであって、いわば体制をゆさぶる危険発言であった。また彼の海外通商論は、当時においても海外の渡航と交易を禁ずる政策を転じさせれば、実現可能なすぐれた実用的意見であったが、利明の説と同様、当時の政策に反映されなかった。当時の社会は、朴齊家の先進的政見を包容せず、鎖国論だけを固守したため、江華島条約を強要されることになる。それは段階的な通商開国ではない、一方的な準備なしの開国であった。その結果、民族的な悲劇を招くことになったのである。

註

(1)

『北学議』「農蠶總論」三三四ページ 以下『北学議』は大洋書籍(一九七三)の韓国名著大全集による

(2)

『北学議』「尊周論」三六〇ページ

(3)

『経世秘策』卷下二二頁 以下『経世秘策』は岩波書店(一九七〇)の日本思想大系44『本多利明・海保青陵』による

(4)

『経世秘策』後編六一頁

(5)

『北学議』「財賦論」三四七ページ

(6)

『北学議』「通江南浙江商舶議」三五一ページ

(7)

『経世秘策』後編三五頁

(8)

『北学議』「車」二五一ページ

(9)

同右

(10)

『北学議』「附丙午所懷」四〇四ページ

(11)

姜在彦『朝鮮の開化思想』岩波書店(一九八〇)八八ページ

(12)

『経世秘策』卷下二八頁

(13)

塚本晃弘『幕末近代思想の系譜二』(国学院経済学 第一八卷第二号)昭和四五年

(14)

『北学議』「末利」三八五〜三八六ページ

(15)

『経世秘策』卷下三一頁

(16)

『経世秘策』卷上十一頁

(17)

『北学議』「銀」二九七ページ 我が国では毎年、数万兩の銀を中国に輸出して、薬材・紬緞などを輸入している。

しかしながら、我が国の物と向うの銀を交換してくること
はない。銀というのは、千年を経て変わらぬ物であ
る。しかし薬は、半日で消化されてしまい、絹は人をほ
むることに使つて半年で腐つてしまう。このように、千
年たつてもなくならない物を、半日・半年でなくなるもの
(薬・絹)と替えて、限られた山川の資源を、一度送り出
したら帰つて来ない地域に輸出するので、銀は日々貴重に
ならざるを得ないのである。

(18) 第一焰硝、第二諸金、第三船舶、第四属島の開業

(19) 『北学議』「市井」二九五—二九六ページ 財物は井戸の
ようなもので、汲めば汲むほど満ちて、ほうっておくと乾
いてしまう。それで絹織物を着る人がいなければ、絹を織
る人がいなくなる。そこで女工が衰退する。器がゆがんだ
りしてもいやがらないので、国の工匠・陶冶の仕事がな
くなり、したがって技芸もなくなつた。農事が凶作になるの
は、その方法を知らないからである。商利が薄くなると、
その商売が出来なくなる。それで四民がみな困窮し、お互
いに助け合う道がない。国中の宝物もこの地域内では受け
入れられず、外国へ流れてしまい、他国人はますます富強
になるのだが、私たちは逆にますますしくなつていくのが自然
の趨勢である。

(20) 同右 二九五ページ 夫中國固以奢而亡、吾邦必以儉而
衰、何也、夫有其物而不費之謂儉、非無諸己而自絶之謂
也、今國無採珠之戸、市無珊瑚之價、持金銀而入店、不可

以買餅餌、豈其俗之眞能好儉而然歟、特不知所以用之之術
耳、不知所以用之、則不知所以生之、不知所以生之、則民
日窮

(21) 『経世秘策』後編十四頁

(22) 註(1) 前掲書一一七ページ参照

(23) 『経世秘策』補遺五頁

(24) 『北学議』「北学辨二」三九五ページ 現在我が国の人々

は阿雁と漆汁のような俗たる膜に覆われている。(中略) 今
我が国の人々は胡という一文字をもつて直ちに中国天下を無
視しようとしているにもかかわらず、私が「中国の風俗は
このようによい」と言うのは、彼らの一般の考えと大きく
違っているからである。何をもちて証明するかと言へば、
試しに人々に「中国の学問にも退溪のような人がおり、文
章にも簡易のような人がおり、名筆としても韓漢よりすぐ
れた人がいる」と言うと、その人々は必ず腹を立て顔色を
かえ、「どうしてそんなことがありうるか」というのであ
つて、ひどい者はその話をした人に罰を与えようとするで
あろう。私が何人かと議論したところ、私を誹謗する人が
かなりいたので、この事を書いて自警するのである。

(25) 『経世秘策』卷下十四頁

(26) 同右 四二頁

(27) 『北学議』「漢語」三〇三ページ

(28) 『経世秘策』卷下十八頁

(大阪大学大学院院生)